

# 軽空母短編・艦これ二次創作 小説

Clown

「へ？ 艦載機の変容が違うのはなんでかって？」

「ああ。何となく気になってな」

斑目提督の思いがけない質問に、目の前の艦娘は目を丸くした。白い和風のジャケットコートに袴姿、長く美しいすみれ色の髪を跳ねるに任せた、少し吊り目の女性。軽空母である彼女、隼鷹は、大湊の涼やかな夏風を感じながら、司令部庁舎の裏側に設えられた縁側に座って真っ昼間から酒気にほんのり頬を染めている。

隣に座る斑目は、同じく軽空母クラスの艦娘である和装の女性、鳳翔から炙り烏賊を受け取ると、その串を何となくくるくる回しながら続ける。

「同じ軽空母でも、鳳翔は弓矢、お前は式神だろう？ 何か理由があるのかと思って」

「理由……理由なあ……。あんまり考えたことなかったわ、あっはっは」

「無いのかよ……」

脳天気には笑う隼鷹に、軽く肩を落とす斑目。鳳翔も隣で聞いていたが、やはり理由は分からないのか小首を傾げている。

「そう言えば、皆さんそれぞれスタイルが違いますものね。私は昔から弓道を嗜んでおりましたから、自然と弓矢に落ち着いたのだと思っておりましたが……」

「あー、アタシは弓とかカラッキシだからなあ」

「そういうものなのか」

何となく納得しかけた斑目だが、隼鷹が傍らに置いてある巻物を見つけて再び首を傾げた。

「といっても、別にお前達が式神や陰陽道に造詣が深いとか、そういうわけじゃないんだろう？」

「ぜーんぜん！ 陰陽師って、アレだろ？ アベノミクスとかがやってた」

「……安倍晴明のことか？ 名前も覚えてないとか論外なんだが……」

斑目のさらった批判に、隼鷹は拗ねるように口を尖らせる。まあまあと鳳翔が空になっている彼女の杯に日本酒を注ぐと、一転して上機嫌な顔になった。現金なヤツだ、と思いながらも、斑目はなおも追求する。

「じゃあ、何故そうなった？ きっかけとか無いのか」

「さあーどうだろ？ きっかけも何も、アタシが艦娘になったときには、もうそういう仕様になってたしなあ」

「ふーん。艦装自体の特性という事なのか」

「そうかも知れませんね。先代の鳳翔の時も、やはり弓矢でしたから」

斑目の推測に、鳳翔も頷く。鳳翔は大湊警備府の中でも最古参の一人だが、彼女たちの基準で言えば今の鳳翔は四代目にあたる。艦娘の中では比較的着任サイクルの落ち着いた艦娘だ。

艦娘の魂は、艦装となる艦船の解体とともに一部の記憶を受け継いだ状態で複製され、同型の艦船が再建造されたとき、また別の艦娘候補者の魂に上書きされる。大雑把な解釈だが、彼女たちの話を総合した中から生まれた有力な仮説と考えられている。そして記憶を受け継いだ艦娘候補者が艦船を概念変容で圧縮し、艦装として纏うことで初めて新たな艦娘として迎え入れられる

先代の鳳翔は、舞鶴鎮守府の守護者として奮戦したと斑目は聞いている。艦装の老朽化が目立ったため解体となり、先代の鳳翔は艦娘としての能力を失った。その後、舞鶴に勤務していた整備工と結婚し、今も舞鶴で艦娘達を見守る存在となっているという。

「そーいやアタシの先代も陰陽師スタイルだったわ。飛鷹もそうだし。あ、もしかして、アタシらが商戦改装空母だからかな？」

「いや、横須賀の龍驤も確かそうだろう。あまり関係ないんじゃないか？」

「あ、そっかー。残念」

何が残念なのかよく分からない台詞を吐いて、隼鷹は杯の中身を飲み干す。「ッかー！ いいねー！」などと言うおっさん臭い感嘆を横目に、斑目は遊んでいた炙り烏賊の串をほおばった。

鳳翔は提督の杯の様子を見ながら、思い出したように話し始めた。

「そう言えば、正規空母の皆さんでも少しずつスタイルが違いますね。赤城さんや加賀さんは長弓ですけど、瑞鶴さんや翔鶴さんは短弓ですし」

「今呉で訓練中の装甲空母・大鳳は確かクロスボウだと聞いたな」

斑目は大本営から最近送られてきた資料を思い浮かべていた。新鋭艦として建造されていた大鳳は三年程前に完成していたが、対応する艦娘が現れるのが遅く、去年ようやく公試運転を終えて、今は呉鎮守府で戦闘訓練中とのことだった。その装備が、確かクロスボウだった。

「皆さん、その艦にあった艦装が用意されているのかも知れませんね」

「なるほど、そうかも知れんな」

艦装の元になった艦船の特性に紐付けられている、と言うのが一番しっくりくるようだった。まだ疑問点が無いわけではないが、それ以上追求しても仕方が無いので斑目はそれで納得することにした。

そこへ、ほろ酔い具合の隼鷹が口を挟む。

「でもさー、アタシら空母の中で一番トリッキーっていやあ、ちとちよ姉妹じゃん？」

「ちとちよ……ああ、千歳と千代田のことか」

水上機母艦から軽空母へと改装され、現在も呉鎮守府にいる千歳と千代田の姉妹は、鳳翔や飛鷹ともまた違う概念変容を持っている。斑目はまだ会ったことが無いが、隼鷹は大湊に来る前に彼女たちとともに任務に就いていた時期がある。

「提督もアレは一度見といた方がよいよー？ 艦載機が操り人形みたいにひょいひょい格納庫から出ては戻りして、すっげーんだから」

「そんなに凄いのか」

「私も一度だけご一緒したことがありますけど、確かに凄いですよ」

「む。そこまで言われると見てみたいな」

鳳翔も微笑みながら同意する。斑目は鳳翔の注いだ酒を受け取ると、ちびりと舐めた。辛口の日本酒が舌をぴりっと刺激する。烏賊の残りを咀嚼して呑み込むと、斑目は思い切ったように膝を打った。

「よし。暇な内に呉に連絡して、視察にでも行くか。上手くいけば訓練中の大鳳も見れるかも知

れん」

「やったぜ！」

「……なんでここでお前が喜ぶんだ、隼鷹」

隣でガッツポーズを取る隼鷹に、怪訝な表情を浮かべる斑目。隼鷹はきょとんとした顔をすると、そのまま首を傾げた。

「え、連れてってくれるんだよな？」

「何故そうなる」

苦笑交じりの斑目に、隼鷹はみるみるうちに涙目になると、縁側に寝そべってだだっ子のように手足をじたばたし始めた。

「やだやだー！ アタシも連れてけよー！ 宝剣が……魂心の一滴がアタシを呼んでるんだよー！」

「酒のためにそこまでするか」

呉と聞いて酒造が真っ先に思い浮かぶ辺り、隼鷹の酒好きは筋金入りだった。斑目は鳳翔と顔を見合わせると、互いに苦笑する。どうやら連れて行くと言うまでこの大きな子供は鎮まりそうにない。

「分かった分かった。その代わり、対外演習の旗艦として仕事するんだぞ」

「ほ、ホントに？ やったー！ 仕事の後の一杯が楽しみだぜー！」

ぴたりと泣き止み、即座に起き上がってもうニコニコしながら仕事が終わったときの話をしている隼鷹に、再び苦笑する斑目。そこへ、買い出しに出ていた二人の駆逐艦娘、電と雷が帰ってきた。

「ただいまなのです、司令官さん。頼まれていた缶詰、買ってきたのです」

「あー！ まーた隼鷹さんはこんなお昼間からお酒ばかり飲んでー！ そんなんじゃダメよー」

嬉しそうに缶詰の入った袋を掲げる電と、腰に両手をやってお説教モードの雷。更に後ろから秘書艦である戦艦・金剛と、最近半ば金剛のお目付役と化している姉妹艦の霧島の二人もやって来た。

「ヘーイ、提督ウ！ ティータイムにするならワタシも混ぜて欲しいデース！」

「お姉様はまだ仕事が残ってます」

「ソナーー！ 霧島ァ、堅いこと言わないネー！」

情けない声で懇願する大湊警備府・総旗艦に対して、眼鏡の奥に冷たい光を宿した霧島は「ダメです」の四文字を繰り返す。電は鳳翔と缶詰おつまみトークを繰り広げ、その横で雷の蕩々と続くお説教に隼鷹が頭を抱える。

斑目はそんな様子を見ながら、ほっとため息をついた。こうしている間にも、彼らの敵である異形の船団・深海棲艦は世界の海を我が物顔で闊歩している。だが、それと戦う彼女たちは、ただの兵器では無い。こうして皆と笑いあい、時には喧嘩もする、一人の人間でもある。願わくば、こんな平和が続く世界が、いつか。

「いつもながら賑やかな艦隊だねー」

「ま、平和で良いよねー」

いつの間にか背後に立っていた重巡・鈴谷と雷巡・北上が、斑目の思いを代弁した。「まったく」  
と相づちを打ちながら、斑目は遙か遠くに視線をやる。近いうちに、大きな作戦がある。  
三十年ぶりに現れた、姫級深海棲艦の報。以前の作戦では、大勢の艦娘の命が喪われたと言う。  
それ以上とも言われる時期大規模作戦の一端を、この大湊でも担うときが来る。せめてそれま  
では。

それまでは、この賑やかな日々が続くことを。

(了)